

黒澤さんの思い出（立石庸一）

Yoichi TATEISHI: In Memory of Kurosawa-san

琉球大学教育学部

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1, Chihara, Nishihara, Okinawa, 903-0213 JAPAN

私が黒澤さんに最初にお会いしたのはいつのことだったのか、定かではないのだが、まだ東京教育大農学部の学生であった私が東大の総合資料館（現在の総合研究博物館）に通い、当時植物学教室の助手であった大橋広好先生のもとで研究のお手伝いをしながら、実質卒業研究の指導を受けるようになった 1970 年春頃のことであったろう。私の記憶の中で鮮明な黒澤さんの姿は、資料館の玄関左手の奥まったところに当時あった温室の植物の世話をされていた。資料館 3 階の植物作業室から窓外の温室を見下ろすと、白衣を着た黒澤さんが上体を左右に大きく振る独特の歩き方で温室の内外を巡り、アオキ類など日本はもとよりヒマラヤなどから集められた植物の世話をされている姿が見られた。原 寛先生が定年退官を間近に控えた頃で、私は幸運にも先生の最後の講義を正規の学生に混ざって受けさせていただくことができ、原先生のもとで助手をされていた黒澤さんともいつしか親しくお話できるようになった。旧軽井沢の原先生の別荘にも泊めていただいて、軽井沢の佐藤邦雄さんのお宅まで通い、お庭を借りて植えていたヒマラヤ高地産の植物の世話をされている姿に間近に接することになった。東大の温室でも佐藤さんのお庭でも、黒澤さんは栽培している植物をわが子のように慈しみ、一つひとつの植物がそこに植えられるようになった経緯を話してくださった。染色体の観察に必要な植物については、時折根を掘り起こしては根端の固定をされていた。ちょうど「軽井沢の植物」の出版準備をされていたころでもあり、原先生は原稿を書かれ、黒澤さんは挿図をつくられていた。私が呼ばれたのも黒澤さんのお手伝いや植物の撮影などで助けになると思われるのこともかもしれないのだが、図版に使えるような写真を撮ることもできずたいしてお役にはたてなかった。

軽井沢の他にも原先生と黒澤さんの調査行に何度かご一緒させていただいた。その中で最も記憶に残るのが 1974 年秋の北海道行であろうか。9 月初旬に札幌で開催された植物学会の大会の終了

後直ちに札幌を発ち、釧路、弟子屈、網走、摩周湖、知床、阿寒湖、日高などを巡り、帰路は青森によって細井幸兵衛さんに付近の案内をしていた。10 日間の旅行であった。知床ではオシニコシンの滝でバシクルモンを探索し、日高庶野ではこの採集行の主目的の一つであったミツバツツジを採集した。日高ではさらに「アポイ岳の高山植物」の著者の一人である高橋誼さんや札幌からかけつけた村井さんはじめ黒澤さんのお友達とともに秋の気配の濃くなったアポイ岳に登り、青森では津軽の湿原を細井さんの計らいで歩くことができた。こうした調査の行程は、計画からチケットや宿の手配など全て原先生がご自身でされているようで、弟子屈から帯広までの 2 日間は黒澤さんのお知り合いの細川さんが車で案内してくださったが、その他の旅程は原先生のつくられた旅程表を忠実に実行するというものだった。黒澤さんと私はおんぶにだっこといった状態で、次はどんな植物に出会いどんな景観が見られるのか、わくわくしながらも二人とも 100% 原先生任せの旅であった。

そんな黒澤さんと私であったが、帰京後直ちにヒダカミツバツツジとして原先生が新種記載された日高のミツバツツジの花を見に行こうということになった。翌々年の 5 月、今度は黒澤さんと二人の行き当たりばったりの旅であったが、前回現地で同行された方々がまた助けてくださって、庶野の山中でヒダカミツバツツジを訪ね、初春のアポイを堪能することができた。旅程をほぼ終えて戻った札幌の郊外で黒澤さんが見つけたシラネアオイ群落の花の青さが今も鮮烈によみがえってくる。

私が東北大に移ってからは黒澤さんと野外にでる機会はほとんどなくなり、時折上京した際にお会いしてしばし話をするくらいになってしまったが、それでも二度ほど仙台に来てくださった際には近郊の山を私の家族と一緒にご案内することができた。こうした調査行で生きた植物について多くのことを学ぶことができたと思う。